2015.4.11

地球ゴマ 回り納め

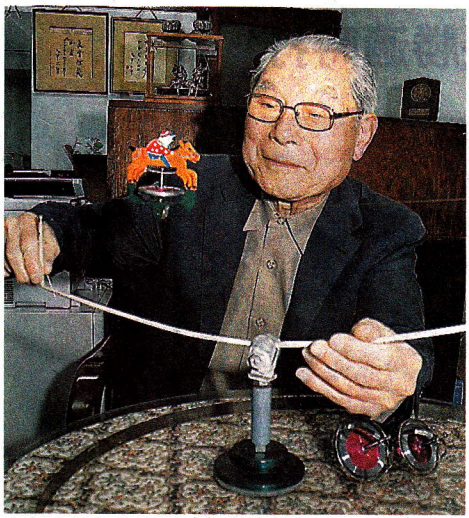
生産94年「タイガー商会」廃業へ

1960～70年代に一世を風靡した玩具「地球ゴマ」。大正時代から作り続けてきたタイガー商会（名古屋市）が4月末に廃業し、生産を終えることになった。学習教材として細々と需要に応えてきたが、職人の高齢化と後継者不足で行き詰まった。

「今日も無事に作ることができた」。工場の時計が午後5時を過ぎるのを見て、工場長の巣山重雄さん(85)はほっとした表情を浮かべた。

職人は3人。巣山さんと鳥居賢司さん(52)、そして定年退職後も時間が空けば会社へ来ている男性(65)だ。約50年働く巣山さんが会社の実質的な切り盛りもしている。

十字に組んだ2本の細い金属を球状に曲げ、内側に1枚の円盤を鋼鉄製の縦軸に据え付けた地球ゴマ。円盤は誤差100分の2ミリ以下で手作業で削り込む。「円盤のひな型に合金を流し込み、きれいに整えるのが一番難しい。小さな気泡が入っただけで、うまく回らなくなる」と巣山さんは話す。



軸に巻き付けた糸を引っ張って、地球ゴマを回す巣山重雄さん。約50年間、製作に携わってきた＝名古屋市千種区豊年町

職人高齢化・後継者難 85歳工場長も限界

発明したのは初代社長の故・加藤朝次郎さんだ。1分間に3千回転以上の高速で回り、回り始めるとなかなか倒れない。地球が傾きながら自転する状態を、このこまの回り方で説明できることから「地球ゴマ」の名がつけられた。

1921（大正10）年に生産が始まり、戦前から輸出された。輸出統制が敷かれていた敗戦直後も、連合国軍総司令部の配慮から欧米を中心に販売されたという。60～70年代にはテレビCMで人気に火がつき爆発的にヒット。ピーク時には20人を超える職人たちが年に20万～30万個を作った。

だが、80年代に入るとテレビゲームなどが普及し、生産量は右肩下がりに。大学や高等専門学校などの教材として、90年代後半以降は年に約2万個を生産。2005年に先代社長の加藤武さんが亡くなると、職人は巣山さんら2人に。その後、鳥居さんが入社した。

昨年、巣山さんは腰の手術を受け、製造はおろか会社の切り盛りさえ難しくなり、廃業を決めた。

注文は1月に締め切った。大小2種類あり、価格は2千円と1600円だったが、インターネットなどでは2万円前後で取引されることもあるという。鳥居さんは「地球ゴマはライフワークなので途絶えさせたくない。事業を支援してくれる企業や個人を粘り強く探したい」と話している。

（安田琢典）